

— 横浜の方形周溝墓 —

35



溝で区画された墓



権田原遺跡F区の方形周溝墓群

P.2-3復元画参照

弥生時代の人々は方形周溝墓といわれる墓に葬られていることがあります。方形周溝墓は周囲に溝を掘り、その土を内側に盛って方台状にし、中央に壙をほり、そこに人を埋葬しました。この墓の形態は縄文時代にはみられず、弥生時代を中心に古墳時代前期までみられます。関東地方では弥生時代中期に現れ、それまでの再葬墓と交代します。中央部の土壌は近畿地方では複数基造られ、数人が埋葬されていることが一般的ですが、関東地方では一人だけが埋葬されていることが多くみられます。また方台部だけでなく、周溝とよばれる周囲の溝に埋葬されることもあります。これらの墓はムラに隣接した場所に数基から数十基がまとまって造られます(墓域)。

都筑区の権田原遺跡でも環濠の外側に大きく3か所に分けられて墓域が形成されています。ムラの北側に46基(F区)、南側に22基(新吉田十三塚遺跡)、その更に南側に6基(矢東遺跡)の方形周溝墓が造られました。また、主体部といわれる埋葬施設から管玉が副葬された貴重な例もみつけられました。

※1 「壙」には墓穴の意味が含まれるためこの字を使用しています。

※2 遺体を一度土葬したあとに骨を土器の中に入れ、その土器を穴に埋める埋葬

※3 「埋文よこはま」34号参照

墓をつくる

Let's Thinking

整然と並んだ墓

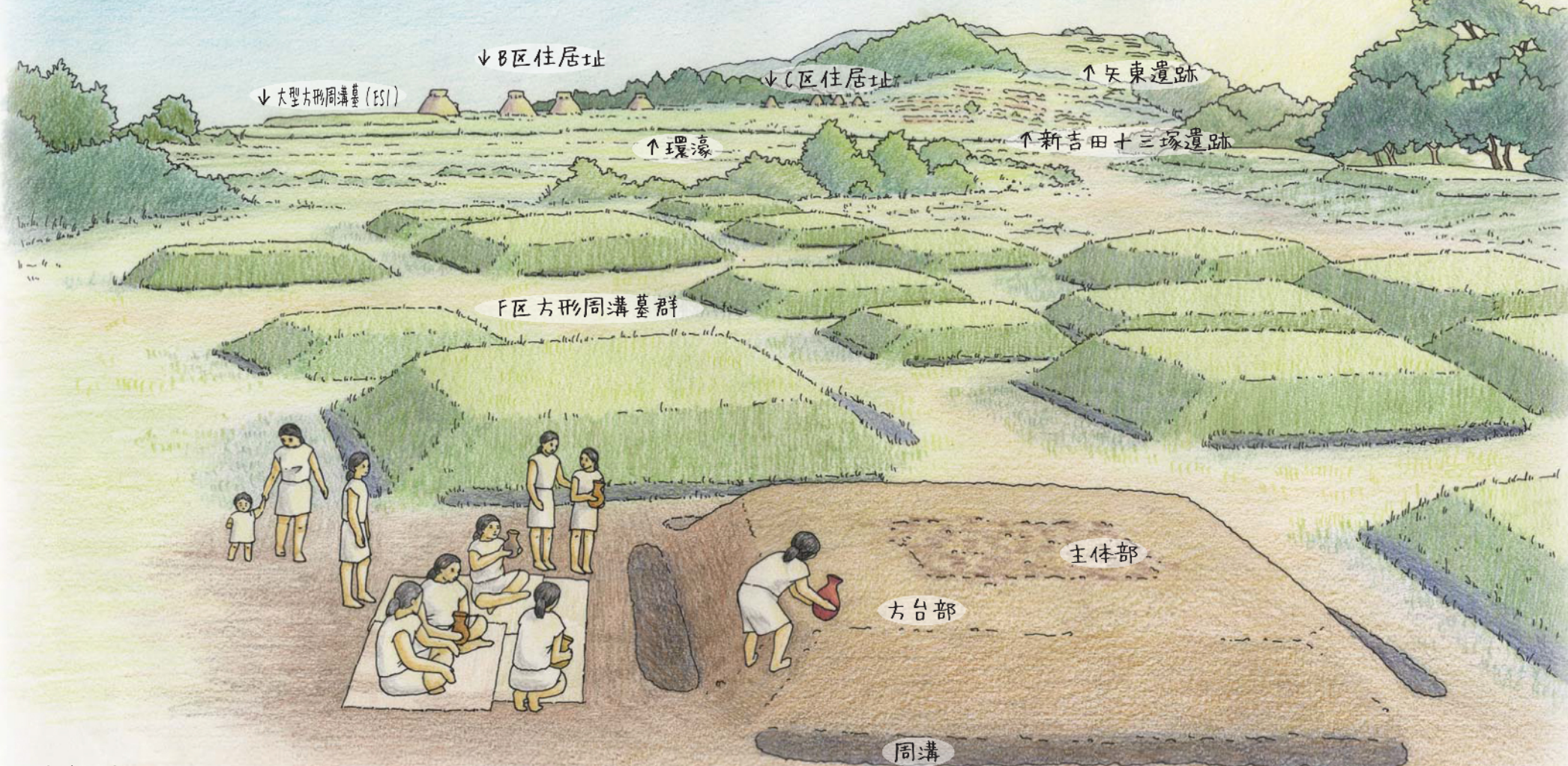


歳勝土遺跡や権田原遺跡にみられるように弥生時代中期の墓は後期に比べてその数が多く、群集して存在しており、一見整然と並んでいるように見えます。しかし細かくみると、隣の墓の溝を切って新しい墓が造られていたり、墓の向きがずれていたり様々です。隣り合った墓同士が数基ごとにグループを作っているようです。弥生時代中期の方形周溝墓は家族墓とみられ、また墓のサイズが10m前後のものが多くありますが大小様々な規模を持つことから、その規模差に何らかの階層性があるとみられています。

大型の墓



復元画の左にみられるように、権田原遺跡では、群在する方形周溝墓群とはずれて、環濠内に18m近い大型の方形周溝墓ES1が1基みられます。このように集落内に構築された大型の方形周溝墓は都筑区折本西原遺跡、磯子区三殿台遺跡、戸塚区上倉田遺跡などでもみられます。しかし、一方で同様の規模のものが同一遺跡内・地域内の集団墓地内に築かれる場合もありますが、このような大型の方形周溝墓を持つ集落は限定されており、地域の中核をなす遺跡である場合が多くみられます。これらは地域社会の中心人物など有力者の墓であったと考えられています。

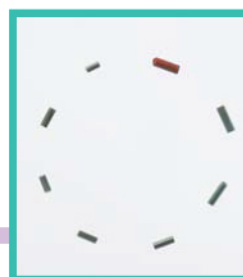


画:さぶりゆきこ



葬られる人

亡くなった人は主に方台部の中央部分に掘られた土壌(主体部)に安置されますが、関東地方では主体部は単基であることが一般的です。主体部のある方台状の部分は周囲の溝を掘った土が盛られ、こんもりと高くなっていますが、たいていの場合、後世の耕作等でその姿を消してしまい、右記写真にみられるような溝と土壌の下面のみが残されることが多いです。周溝にも幼児埋葬用の土器棺墓が安置されることがあります。主体部への埋葬は一般的に木棺に遺体を入れて埋葬したと考えられており、西日本では木棺が出土します。関東地方の木棺出土例はわずかで、神奈川県内では出土していませんが、土層断面の観察によって木棺が想定されています。弥生時代中期では後期に比べ副葬品があまりみられませんが、玉類などの装身具が出土することがあります。主体部からの副葬品は非常に少なく、横浜市内では権田原遺跡でのみ見られます。



権田原遺跡FS30号
方形周溝墓出土の管玉



溝から何が出る?



権田原遺跡FS33号方形周溝墓

方形周溝墓からの出土遺物は住居や環濠などと比べると非常に少なく、その大半は土器です。壺が多く、周溝から出土します。周溝から出土する土器は1~2個が大半で、遺物が全く見られないこともよくあります。土器は溝の覆土中層や上層から出土することが多く、これは溝が掘られた直後ではなく、ある程度時間が経過してから土器が溝内に入れられた、もしくは自然と落ちたことを意味します。その理由として、時間が経過したのち儀礼などの祭祀行為が行われたとする説や土器の出土位置が溝の端やコーナー部分である例が多いことなどから方台部の端に土器を備え、それがある程度経ってから溝に落ち込んだとする説など様々あります。

※覆土とは遺構の内部に堆積した土のことをいいます。

横浜市内の方形周溝墓(弥生時代)がみつかった遺跡



いっしょのとなりの墓

方形周溝墓の墓域はムラの外の隣接地帯に形成されることが多く、例えば縄文時代中期の集落が環状に配列した住居群の中央に墓域を形成するのとは大きく異なります。この居住域と墓域の分離は、弥生時代の集落の特徴の一つです。

神奈川県内での弥生時代の初めの頃の遺跡は丘陵や山間部にあり、再葬墓がみられます。弥生時代中期中葉になると小田原市中里遺跡から神奈川県内最古の方形周溝墓が40基以上も発見されるようになります。南関東では千葉県や埼玉県からもこの時期の方形周溝墓がみつかっています。そして中期後葉の宮ノ台式土器が分布するところになると県内のいたるところに集落がみられ、鶴見川の中・上流域にも大塚遺跡や榑田原遺跡のような環濠集落が点々とつくり、集落に隣接して方形周溝墓が群在する墓域が設けられます。後期になると方形周溝墓の数は減少していき、墓に葬られる人がかなり限定されてきたと考えられています。

前号(34号)で取り上げた大塚遺跡・歳勝土遺跡も集落と墓域に別々な遺跡名がついていますが、二つで一つのムラと考えられており、巻頭写真で紹介した榑田原遺跡でも隣接する新吉田十三塚遺跡、矢東遺跡は同一のムラであったと考えられます。鶴見川流域にはこういった遺跡が幾つもあります。

横浜市内の方形周溝墓一覧(弥生中期)

所在地	遺跡名	基数	規模(周溝を含む)(m) ※()は推定値	主体部の有無/数	出土遺物		
					主体部	方台部	溝部
港北区	宮ノ原 みやのはら	1	—×11	—			
都筑区	榑田原 ごんたつばら	46	最大17.5×(17.7) 最小5.9×5.8	1個のものが大半 2個のもの1基と甕棺有	管玉、小型土器	甕棺、壺	壺、広口壺
	新吉田十三塚 しんよしだじゅうさんづか	22	最大10.5×12.4 最小7×7.2	検出できたものはすべて1基			壺
	矢東 やひがし	6	最大18.1×12.5以上 最小9×5.0以上	検出できず			壺
	老馬 ろうば	2	11.34×10.16 10.0×14.80	すべて1基			なし
	歳勝土南 さいかちどみなみ	4	8.5以上×10.6 14.8×11.7以上	1基			壺
	歳勝土 さいかちど	25	14.9×14.5 6.2×9.9	検出できたものはすべて1基			壺、広口壺、鉢、甕片 壺棺
	綱崎山 つなさきやま	4	最大12.83×12.22 最小9.2×8.93	検出できず			壺、甕片
	矢崎山 やざきやま	11					
	矢崎山西 やざきやまにし	5	14×13.8 9.4×9.8				壺、甕、被熱痕碟
	折本西原 おりもとにしはら Ⅰ次調査	1	25.6×26				壺、鉢、甕、ミニチュア土器 土製円盤、扁平片刃石斧
	折本西原 おりもとにしはら Ⅱ・Ⅲ次調査	7	最大23.3×22.66 最小8.78×(9.02)	2基のもの1個のみ、他は1基	黒曜石チップ		壺 壺棺
	藪根不動原 やぶねふどうはら	7					
	能見堂 のうけんどう	54	最大13×13.5 最小(7.40)×9.22	検出できたものはすべて1基			壺、甕
青葉区	観福寺裏 かんぶくじうら	1	2.0以上×10以上	2		球状土製品	壺、壺、扶入石斧
	観福寺北 かんぶくじきた	2	14.5以上×7.5以上 11.4×3.6以上	すべて1基			壺、高坏鉢、甕 土製円盤、鼓石、打製石器
	朝光寺原 ちょうこうじつばら	18	最大11.92×11.30 最小7.96×—				
	上恩田遺跡群 かみおんだ 堀ノ内b ほりのうち	1		1?			
	藤林 ふじばやし	1	—×4.8以上	1			
緑区	宿根北 しゅくねきた	2	14.2×14.4 10.2以上×10.2以上				壺、甕、異形土器
	宿根東 しゅくねひがし	1	25.6以上×19.1以上				
	三枚町遺跡	1					
保土ヶ谷区	仏向 ぶつこう	4	10.85×11.95 —×9.8	検出できず			甕片
磯子区	三殿台 さんどのだい	1	10.4以上×19.6以上 (16)×—	検出できず			土器 碟、獣・魚骨片
戸塚区	上倉田第1 かみくらた	1	20×22	1	破片3 (壺2、甕1)		壺、鉢、甕
栄区	飯島町853,855,857番地 所在遺跡	1					壺
	笠間中央公園 かさまちゅうおうこうえん	4	12.70×12.20 10.70×11.30				壺、甕片

※規模の最大値と最小値は計測可能なものを優先し、「～以上」としたものは検出値で記載した値より大きくなる可能性があるものです。



日本の土壌と骨

方形周溝墓は弥生時代の人々の墓です。しかし、主体部といわれる中央部分から本来ならばみつかるといわれる人骨がなかなか見つかりません。そればかりか、遺体を入れたであろう木棺もなかなか検出されません。どうしてなのでしょう？

条件	植物起源							動物起源			
	種実・葉 (炭化)	材 (炭化)	種実・葉	材	花粉・胞子	植物ケイ酸体	珪藻	骨	貝	有孔虫	昆虫
埋没後	酸性	○	○	○	○	○	○	△	△	△	○
	中性	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	アルカリ性	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○
堆積時	礫	△	△	△	×	×	×	△	△	×	×
	砂	○	○	○	△	△	△	△	△	△	△
	シルト・粘土	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

○：ほぼ良好，△：部分的・場合による，× 悪い （松井章編 2003 『環境考古学マニュアル』を一部改変）

日本の遺跡からは骨や植物などの有機質の遺物は土器や石器などと比べ、検出率がとても低いです。これは日本の土壌と大きく関係しています。上図は埋没条件による生態遺物の保存状態の違いを示した図です。つまり各種の生態遺物がどのような条件下で残存するかを表しています。このような研究を化石生成学(Taphonomy: タフォノミー)といいます。生態遺物の最も遺存率の悪い条件は酸性度の強い乾燥と湿潤が交互に繰り返される土壌であり、逆に最も保存状態に恵まれているのが常時水に満たされ、中性から弱アルカリの土壌です。つまり、土壌の含水量とpHの違いによって土壌に堆積していたものが残ったり消えてなくなってしまうりするので。

方形周溝墓の命名と三殿台遺跡

1964年、東京都八王子市宇津木向原遺跡でのちに「方形周溝墓」とよばれる遺構が発見されました。調査団の団長であった大場磐雄氏によって方形に区画された溝と区画内の土坑が同一遺構の墓として認識され、1965年に「方形周溝墓」と命名されました。それ以前にもこうした遺跡は発見されておりましたが、これを契機に各地で同様の例が次々確認され、「方形周溝墓」という用語も定着していきました。

磯子区三殿台遺跡はこの宇津木遺跡の発掘より前に調査され127号、131号、208号遺構という3条の溝状遺構が検出されています。当時の報告書ではまだ墓という記載がされていませんが、これらは方形周溝墓の一部と考えられます。



三殿台遺跡 2017.2現在
白線部分が方形周溝墓の周溝



能見堂遺跡
水-50地区17号方形周溝墓
主体部の木棺痕と思われる
部分に横たわる

○展示 平成29年度「横浜の遺跡展」

弥生人 GO・^{ごー}濠・^{ごー}業！
～権田原遺跡の環濠集落と方形周溝墓～

平成29年4月4日(火)～6月11日(日)
横浜市歴史博物館 企画展示室

観覧料:大人200円 高校生・大学生100円 小・中学100円
※企画展「君も今日から考古学者!ー横浜発掘物語2017ー」と同時開催

関連講演会

○「横浜の遺跡展」関連講演会

「港北ニュータウン弥生時代中期の権田原遺跡」

日時:5月14日(日) 13:00～16:00(12:30開場)

講師:鈴木重信(元当財団埋蔵文化財センター)

伊丹 徹(神奈川県教育委員会文化遺産課)

会場:横浜市歴史博物館・講堂

定員:150名

費用:500円(資料代)

申込方法:往復はがきに、講演会名・住所・氏名(ふりがな)・

電話番号を記入の上、下の埋蔵文化財センター住所へ

申込締切:2017年4月18日(火) 必着

フロアレクチャー

○担当学芸員・調査員による展示解説

5月14日(日) 11:00～

6月4日(日) 11:00～、14:00～

同時開催の「横浜発掘物語 2017」と「横浜の遺跡展」の解説をあわせて実施。各回40分程度。

参加は無料です(企画展チケットは必要)。

開始15分前までに研修室にお集まりください。

○主な展示資料

早淵川流域の弥生時代中期遺跡(権田原遺跡、大塚遺跡、歳勝土遺跡、綱崎山遺跡、関耕地遺跡ほか)出土土器・石器・鉄器・玉類/鶴見川流域の弥生時代中期遺跡(折本西原遺跡、能見堂遺跡ほか)出土土器

《埋蔵文化財センターのご案内》

JR根岸線「港南台」駅

2番バス乗り場より神奈中バス港36・86系統「上郷ネオポリス」行き
または港40系統「栄プール」行き、「上郷ネオポリス」下車徒歩1分

京浜急行「金沢八景」駅

国道沿い1番乗り場より神奈中バス金24・25系統「上郷ネオポリス」行き
終点「上郷ネオポリス」下車 徒歩1分

- ・見学等の施設利用は、平日の9～17時となっています(受付16時まで)。
- ・団体の施設利用にあたっては、事前にご連絡ください。

埋文よこはま35

発行日 2017年3月20日

編集・発行 公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センター

〒247-0024 横浜市栄区野七里2-3-1

TEL. 045-890-1155

FAX. 045-891-1551